



大阪築港視察中の土木學會一行



京都市役所樓上の土木學會一行

土木學會の關西視察旅行

昨年は富山縣に東洋第一の小牧堰堤工事を視、又黒部川の溪谷を視察して土木學會第十三回の視察旅行は大成功の内に參加會員に非常な印象を與へたのであつた。

本年は視察箇所を大阪と京都に於て恐らく昨年以上の計畫をたてられた事と思ふ。而してそれは實際に非常な盛會であつた。

先づ視察旅行の第一日たる四月二十八日は日曜日の好天氣であり、大阪驛から阪急ビルの邊りの人出の雑踏は自動車も進まぬ位であつた、午前九時半までに參加會員は旅館から、ホテルから又は到着したばかりの汽車の中から直に大阪驛裏の大阪鐵道局に集合した。

此日の參加會員約 200 餘名と云ふ土木學會の如何なる會合にも曾て見た事のない多數でサスが大建築の大鐵ビルの長い會議室も狭い感じがした。

最初の講演者、大阪改良事務所長の木村芳人氏が圖面と統計表を列べたてた演壇にたち『大阪を中心とせる鐵道に就て』の要を得たる説明を以て簡單に結ぶ。

それから二等ボギー車三輛連結の臨時列車で大阪驛から臨港線視察に向ふ、大阪の山手線とも云ふべき市の北郊に大阪城や、府廳の建物、さては郊外の各社線の工事なき眺めながら天王寺、難波方面を迂迴して愈々汽車は臨港線に入る、重量に於て東洋第一と稱される木津川橋梁復線式 300 呎徑間で 827 噸の橋や、同一の岩崎川運河橋なきを通過して築港に下車する。

其處で鐵道省御自慢のリフトブリッジを昇降運轉して説明される。

徒歩で一同築港土家に案内されるに數日前竣工式に使はれたまゝの會場設備が其儘に整へられてゐるので、大阪港の舊い史的説明と竣工までの経過を漫書と寫眞を以て巡覽せしめるのも面白い趣向であつたが、參考資料として海水に對する基礎杭の腐蝕作用、鐵筋コンクリート杭の實物切斷面なきを陳列されたのなきが如何にも工學團體の見學としての價値を思出した。

築港資料を一覽してから會員一同は記念の撮影をした。

午餐會は別な土家で廣く明るい點は到底倉庫とは思へない、食後は直に同室で大阪市港灣部の技術課長、松田健作氏の『大阪港の施設に就て』と云ふ題で講演あり、大阪築港の過去、現在、將來を説き、地質不良に因する工事施工の方法を説き有益なヒントを與へられた。

次に大阪市土木部河川課長萩野竹四郎氏は『堂島川の可動堰』に就て簡單な講演をなし。

次に我國に於て近頃バスキュール、ブリッジの利用と宣傳に最も努力したある山本卯太郎氏の二分間講演があつた。

それから愈港内の視察となつて全員一同は

三艘の汽船に分乗して波穏かなる港内を一巡して防波堤の捨石が沈下しブロックが激浪にもまれた有様な姿を見て安治川に入り、天保山の遺蹟を右に見て北港に上陸した、其處に架せられた山本式のバスキュール、ブリツヂの可動實驗を説明を聞いて徒歩安治川口驛に向つた。

安治川口驛より大阪驛に着いたのは午後四時すぎ直に圓タク、市營バスに依り程近い堂島川可動堰の見學に行く、此處の環境を此の可動堰の調和は實に申分ないものである、大阪市に若し此の堂島川中之島がなかつたならば如何に殺風景な都市になるであらう。

堂島川可動堰は本年三月竣工したもので、其偉觀は本號にも掲載したが、既に昭和二年一月號と三月號に詳報した通りである、記者も工事中は數回視察したが、今眼前に出来上つた姿を見るに、テントゲートのゴツゴツしい感じは少しもなく、美しい石造のアーチ橋がゲートを靜かに包んでゐる、階段と高欄の意匠も總て好調和を表現して一層に可動堰を美しいものにした、此の設計の手際は大阪市を訪ふ人に永遠の印象を與へるものである

我々視察團は大阪市の河川課長萩野技師から説明を聞き乍ら、テントゲートの揚卸の實驗を見た、夕暮れの堂島川にサイレンの唸りが響くにゲートは靜かにアーチ橋の内から水中に下つて来る、青い信號燈は忽ち赤く變つて一時船の航通を遮斷するが、川の上流水位は次第に上つて来る。閘門の作用まですっかり見學した。それから一同直ぐ背後の公會堂に向つた。

中之島中央公會堂を云ふ名稱は政治、教育、文藝其他在ゆる社會的の會合に使用される大阪市の代表的な名物の如くに天下に響いてゐる。

土木學會が此の公會堂の階上美々たる大廣間に於て懇親會を開いた事は恐らく初めての事ではあるまいか、然も會費三圓50錢を云ふ小額であるに拘らず食卓の充實せる事、而し

て南北老若の紅裙連數十名をして卓間を斡旋せしめ、餘興に大阪名物たる河合ダンス6幕を準備したるは非常な奮發であつた。

此の懇親會は先輩後輩席を列べ所謂東西相觸れて和氣堂に満ちたものであつた。

第二日の二十九日は恰も天長節である、而して好晴天である、京、阪、神の此の日の人出を云ふものは恐らく數百萬人の動きであつたと思はれる、土木學會の京都行の新京阪に乘車の豫定も遂に變更さるゝ始末となつたが却つて大阪驛から鐵道局の好意により臨時列車を出して貰つて會員は助つたわけである。

午前十時京都驛に着いた、驛から京都の市役所までは市の乗合自動車の御迎へをうけ、京都御所へ向つた、京都市内は非常な人出であるが御所近くなるに一層の人出である。列を作つた拜觀者の人の流れは際限なく續いた様に見える。自動車から下りた我が一行も此の群衆の列に加はつて、土木學會關西支部の紫の旗を先頭に、之を目標に一行連絡を取りつゝ御所の門内に入つた。

新緑の間を掃き清められた京都御所の庭内に入るに拜觀の群衆もほつこ息して落付いたが、忽ち又御大典式場たりし諸建物内に入る頃には所謂すし詰めの道中で恐れ多い事ながら御座所の前さへ横を向いて列のまゝ押し出される始末であつた。何しろ明三十日を以て拜觀は締切られたので今日の祭日と好天氣を得て十數萬の群衆が悉く御所内の御大典式場拜觀に參つたのも當然の事である。

汗ビツシヨリになつて拜觀を終へ御所を出で、徒歩にて市役所に向つた。

市役所樓上で中餐の馳走にあづかる、此所で市の高田土木局長のあいさつがあつて、田邊會長から一同を代表して御禮の言葉があつた。

市役所から乗合自動車に送られて出町柳驛に向つた、其所から叡山電鐵に乘車して八瀬驛に下車した。其所に八瀬遊園地を稱する瀧や池水を利用した小公園がある。徒歩で園内

をすぎ直にケーブルカーの始點たる西塔橋驛で又も列を作つて堂々巡りの順序によつて車内に押込まれるこケーブルカーは急勾配に向つて靜かに登り初める、登る程に眼界遠く開けて壯快の氣に満ち、九分間で終點の四明ヶ嶽驛に着いた。其所から徒歩四丁にして高祖谷驛の架空ケーブルカー電車に乗る事が出来る。此架空ケーブルカー電車は延暦寺驛まで四分間の短距離で僅かに叡山群峯中の一ヶの谷を過るにすぎないが海拔二千三百餘尺の高地點にあり京都市を脚下に見下して雲霧の間を運轉するのであるから一名物となつたに違いない、先年本誌に紹介した紀州の尾鷲驛に於けるものは旅客用のもので、此の叡山の架空索道は遊覽用のものであるが、何れが營業さして優れてをるかは一寸さ判断に苦しむ。何れにしても近代は空中發展の時代であるから架空索道工事も益々増加する事と思ふ。

(叡山の架空索道に就ては本號の記事参照を乞ふ)

此邊で筆者も相當くたぶれ出したので叡山頂上の雲霧にまぎれて一行を別れ、遂に都ホテルの晚餐會にも列席せず東路さして消え失せにけり。(昭和四年五月初の日参加一記者)

旅行に参加せる會員及び準員氏名

尙ほ次表中に數名の不参加があつた。

東京驛より

阿部謙夫	阿部忠作	井上秀二
稻垣兵太郎	江橋貞二	遠藤藤吉
大河内甲一	岡村信三郎	川上浩二郎
鬼海治三郎	小室親一	坂本雅雄
鈴木寅吉	關信雄	丹治經三
八田嘉明	堀永徳太郎	美藤義利
宮長平作	山本新次郎	黒河内四郎
平井喜久松	山中良樹	牧野雅樂之返

名古屋驛より

釘宮磐 林紀彦

岐阜驛より

西岡宏治

大阪鐵道局より

青山咸脩	淺見忠次	荒川恵助
井上伊次	伊藤孝治	伊村高親
和泉三郎	飯尾了二	石井武一

池野敏夫
 岩淵英之助
 上田信次
 小川清一
 大岡崎保吉
 荻野竹四郎
 行徳直誠
 後藤佐彦
 近藤泰夫
 境田賢吉
 鈴木重英
 高武居高四郎
 那須章彌
 中川政次郎
 永井專三
 西出辰次郎
 花井又太郎
 平原重市
 平福留並喜
 細野芳彦
 松田健作
 三池貞一郎
 溝江昇雄
 村瀬吉雄
 森義一
 宮田靖一
 山名晃平
 山本康平
 吉田登道
 吉邊義道
 渡坂助太郎
 木本義一
 鈴木須七郎
 小松慈三郎
 成瀬喬吉
 梅本岩吉
 川口愛太郎
 丹羽鋤彦
 武智正次郎

岩岡武博
 宇野甚七
 江藤禮助
 越智猪之助
 大串榮太郎
 岡山銀次郎
 梶浦正武
 九鬼秀治
 駒田普明
 齋藤飾熙
 清邊水朔郎
 高橋末治郎
 武本光太郎
 直木倫太郎
 中村錦太郎
 永田庄吉
 西畑常秋
 林川保一
 平野正雄
 藤井雄之助
 堀威夫
 増田淳藏
 三浦久種
 溝口親輔
 本森井健介
 山内新一
 山本亥太郎
 吉川至道
 吉奥山盛
 奥中喜代一
 龜田恵
 岩田成實
 瀧山與
 高橋三省
 松浦不二夫
 木村芳人
 島重治
 古川淳三

岩切良助
 植原勇
 遠藤長一
 緒方藤高
 大藤高彦
 岡本專太郎
 木下芳平
 小林彦次
 近藤政光
 竿田秀靜
 重高松
 石橋庫治
 高橋俊四郎
 富田惠四郎
 中川順造
 中村與一郎
 長島敏郎
 畑生徳輔
 平原清一
 平廣石一
 藤田弘直
 松島寛三郎
 溝江五月
 宮本友九郎
 森下文作
 山口秀造
 山本卯太郎
 吉田岩五郎
 和澤清吉
 河村孝二
 岡部村四郎
 吉田耕一
 富田直次
 野々口市太郎
 青木精一
 津田素彦
 五十嵐三郎

大阪築港より

佐藤英夫

新京阪電車天六より

小野榮作	大岡忠一	沖田兼一
川上暢夫	小林武武	佐田浅男
蘭川清	中原武	吉田上

京都より

吉川義太郎	村山喜一郎	近藤幸夫
-------	-------	------

計 231人

〔順序不同〕